

第二回

戦いから共生へ

病原微生物と「共に生きる」という
発想への転換

講師 山本太郎 (国際保健)

山本先生には、最近四半世紀に医学のパラダイムが大きく転換はじめたという、スケールの大きなテーマを語っていただきました。紙幅に限りがあるので、ここでは講演後半のお話を抜粋で紹介します。

「一九八〇年、人類は初めてある一つの病原体を地球上から滅ぼすことに成功しました。天然痘の撲滅です。それはレーウェンフック、パスツール、コッホ、北里フレミングといった人々による、細菌や抗生物質の発見の延長上にあった大成果だったわけです。アメリカの公衆衛生局長官が、下院の公聴会で「もはや感染症の教科書を閉じるときがきた」と言って高らかに感染症に対する勝利を謳った時代でした。

ところが私たちが医学の成果に酔っている間に、じつはいろいろな感染症が世界的に流行しはじめた。エイズ、SARS、MARS、西ナイル熱が出現し、あるいは結核、マラリアといった制圧が可能だと思われた病気が再流行してくる。夢の特効薬だと思った抗生物質に耐性をもった病原体が次々に現れるといった事態に見舞われ



——そうした新しい局面で注目されている常在細菌叢について。《今は肥満、糖尿病、自閉症、アレルギー、クローン病などの炎症性腸疾患がすくなく増えている。こうした病気は私たちの身体に常在している細菌叢（マイクロバイオーーム）の攪乱によってもたらされるのかもしれないと言われはじめています。》

——ご講演では、無菌のマウスに人の糞便を移植して、常在細菌叢の影響を実証するという、驚くべき研究例を紹介いただきました。また、高地ヒマラヤに住む人々の糞便を集め、厳しい環境への適応と体内の細菌叢との関連を調べる研究（フー・プロジェクト）についても触れていただきました。

《フー・プロジェクトには隠された目的があつて、将来世代のために世界中からうんちのストックを

行うことが必要かもしれないのです。なぜなら、人は三歳までに腸内細菌叢全体の骨格が決まると言われており、それが今すぐ攪乱されている。理由は帝王切開の増加と、抗生物質の使用です。今、うちの保存をしておかないと、もしかしたら一度失われた細菌叢はもはや回復しない可能性がある。

細菌叢の攪乱が現代の疫病と関係するとすれば、これまで積み上げてきた近代医学のパラダイムを変えていくことになるかもしれません。今までは、一つの病原体が病気を起こすことを見つけて、それをやっつけることによって病気を倒していたのですが、これからは、私たちに常在する細菌叢の多様性に支えられた健康が重要で、そこから何かが失われることが病気の原因かもしれない。こうした問題に対するアプローチというのが、今後の医学を進めていくことになるのかもしれない。そこに必要なのは、「共に生きる」という考え

方なのかもしれないと思います。》

■講師・山本太郎の本より

小社からはJ・ペパン『エイズの起源』（四〇〇〇円）とM・J・ブレイザー『失われてゆく、我々の内なる細菌』（本紙三面下に広告）の二冊を山本先生の翻訳で刊行させていただきます。ポール・ファーマーの著書『権力の病理 誰が行使し誰が苦しむのか』豊田英子訳（四八〇〇円）には解説文をお寄せいただいております。

